

### 第3章 聞き取り調査の結果

#### 1 聞き取り調査について

##### (1) 聞き取り調査の目的

「活動につながった事業の担当者」と「事業後活動を行っている参加者」の双方から、事業から活動に至った経緯等を聞き取ることで、事業を活動につなぐために必要な要素の具体を明らかにする。

##### (2) 調査先について

調査票調査の間3で回答のあった18市町村37事業から、まちづくりの分野と考えられる6市町村11事業を取り上げることとした。選定にあたっては、人口と広範な地域をカバーすることを考慮した。

##### 市町村及び事業名一覧

市町村名	事業名
札幌市	「さっぽろ市民カレッジ」「市民講師育成事業」
留寿都村	「留寿都村豊かな地域づくり女性活動事業」
八雲町	「YOU・遊・クラス」「あんどん型山車づくり講習会」
旭川市	「シニア大学」「シニア大学院」
西興部村	「西興部村地域学講座」
弟子屈町	「弟子屈高等学校・公民館連携講座」「公民館ミニコンサート」「少年の主張弟子屈大会」

##### (3) 仮説について

活動につながる要因・要素として考えられるものとしてこれまでの研究結果から、以下の表にある「A 事業を進めるための前提」「B 活動につながるための要因・要素」「C 活動の継続につながる要因・要素」の3分野、11項目を考えた。

分野	項目
A 事業を進めるための前提	<ul style="list-style-type: none"><li>・事業主体・担当者の計画性</li><li>・住民が感じる必要性</li><li>・目的からぶれない一貫性</li></ul>
B 活動につながるための要因・要素	<ul style="list-style-type: none"><li>・担当者からの働きかけ</li><li>・参加者同士のつながり</li><li>・参加者の意識の向上</li><li>・上記以外の何か</li></ul>
C 活動の継続につながる要因・要素	<ul style="list-style-type: none"><li>・活動場所の確保</li><li>・支援者・相談相手の存在</li><li>・仲間の存在</li><li>・活動に対するやりがい</li></ul>

(4) 調査の対象について

聞き取り調査の対象は、仮説を検証するため、「活動につながった事業の担当者」と「事業後活動を行っている参加者」とした。

(5) 質問項目

仮説の3分野について検証するため、対象者にそれぞれ以下の質問を行うこととした。(分野では、それぞれの質問がどの分野を見るためのものか表した。)

「活動につながった事業の担当者」への質問	分野		「事業後活動を行っている参加者」への質問
	担当	参加者	
1. 住民の主体的な活動につながった事業を始めるきっかけは、どんなことでしたか。(担当者が必要性を感じた、計画に明記された、住民からの声等)	A	A	1. どのような活動を行っていますか。また、その活動はどのくらい続いていますか。
2. 住民の主体的な活動につながった事業のねらい・目的はなんですか(事業の趣旨・ねらい・目的等)	A	C	2. その活動のやりがいなどをどのようなところで感じていますか。(活動の内容、仲間がいる等)
3. 活動につながった事業が、他の事業と様子が違った点で、この事業に良い影響を与えたと感じたことをあげてください。(核になる人がいた、雰囲気が前向きだった等)	B	B	3. 何がきっかけで、活動が始まりましたか。(事業担当者からの声かけ、参加者にやりたい人がいた等)
4. 何がきっかけで、活動が始まりましたか。(核になる人への声かけ、参加者の声等)	B	B C	4. あなた自身が活動を始める理由となったことは何ですか。(活動に興味があった、〇〇さんから誘われた等)
5. 事業の参加者に活動を促すため、参加者に対し、どのような働きかけを行いましたか。担当者として心掛けていることを含めてお答えください。(常に事業後の活動を意識するように声かけをしていた、事業内に活動の場を用意していた等)	B	B C	5. 事業担当者から受けたどのような支援が活動を始めるときの助けになりましたか。(活動について相談にのってくれた、活動場所を用意してくれた等)
6. 事業参加者が主体的な活動を始めたときにどのような支援を行いましたか。(活動の方向性等について相談にのった、活動場所を用意した等)	C	C	6. 現在、事業担当者からの支援はどのようなことで受けていますか。(活動場所の提供、活動についての広報、人集め等)
7. 活動が進むようになってからは担当者としてどのような支援を行っていますか。(時々活動についての相談にのっている、自身も活動に参加している等)	C	C	7. 今、進んでいる活動について今後どのように展開しようと思っていますか。(現状維持、ちょっとずつ活動の幅を広げる等)
8. 今、進んでいる活動に今後どのように関わろうと思っていますか(ある程度自立した時点で関わらないようにする、相談相手の立場でこれからも活動を支援したい等)	C	C	8. 活動を継続していく上で、不安に感じていることはありますか。(今後の活動の方向性や活動資金等)

## 2 事例

### 事例 1 札幌市「さっぽろ市民カレッジ」「市民講師育成事業」

#### (1) 事業概要

##### ○ 「さっぽろ市民カレッジ」

- ・年間を3期（4～8月、9～12月、1～3月）に分け、市民活動系、産業・ビジネス系、文化・教養系の3系統の講座を実施。平成29年度実績：298講座。
- ・市民活動系の講座では、学んだことを生かしてボランティア活動を行うことができるように計画的にボランティアの場を用意しているものもある。

##### ○ 「市民講師育成事業」

- ・ご近所先生企画講座の講師を希望する市民に、講師としての資質向上・スキルアップを目的とした研修会と交流会を行う事業。平成29年実績：研修会4回、参加者129名、交流会1回、37名参加。

※札幌市教育委員会では、札幌市生涯学習センターの運営を指定管理者である公益財団法人札幌市生涯学習振興財団に委託している。よって、今回の聞き取り調査における担当者は、主に指定管理者の職員を指す。

#### (2) 聞き取り調査の結果

##### ○ 「A 事業を進めるための前提」

##### 「さっぽろ市民カレッジ」

担当者	参加者
<p>・札幌市教育振興基本計画には、基本的方向性1が「自ら学び、共に生きる力を培う学びの推進」と示され、基本施策1－5として「継続的・自発的な学習活動を支援する総合的な生涯学習の推進」施策1－5－1「総合的・体系的な学習機会の提供と自発的な学習活動の推進」主な事業として、さっぽろ市民カレッジを実施「まちづくりや産業の担い手の育成を進めるため、公益性の高い講座の実施により、内容を充実させます。また、学んだ成果を生かせるよう、様々な場や機会の創出を図ります。」と、明記されている。</p> <p>・さっぽろ市民カレッジの講座の1つ、「楽しく歌ってボランティア」（全5回、内1回は介護老人福祉施設でのコンサート）では、学んだことを生かしてボランティア活動を始めきっかけづくりをしている。今回取材をしたサークルは、同事業の修了生が集まり、同様の活動を続けているものである。</p>	<p>・コーラスサークル「プリティボイス」を立ち上げ、月に2回、講師を呼び練習を行い、年に1・2回高齢者施設で慰問を実施。活動は6年続いている。</p>

「市民講師育成事業」

担当者	参加者
<p>・前述のとおり、さっぽろ市民カレッジでは、生涯学習に関する指導者の人材育成を行うこととしていて、ご近所先生企画講座の講師を希望する市民を対象とした「市民講師育成事業」を実施している。その希望者が、自分の行いたい講座をご近所先生企画講座に応募する。応募した講座が採用されるとご近所先生として講座を持つことができる。</p>	<p>・ご近所先生として「明日から使える家族の心理学」講座を実施。活動1年目。本講座の他、個人でもカウンセラーとして活動している。</p> <p>・ご近所先生として「ハーモニカの音色を楽しむ」を実施。6年続いている。ちえりあ他、カルチャーセンター、地元の市民センター、自宅教室、町内会でも教室を開いている。現在は、後継者の育成にも力を入れ、4～5名が講師として活動を始めている。</p>

考察

札幌市では札幌市教育振興基本計画や「さっぽろ市民カレッジ」設置要綱等に学んだことを生かして活動する市民の育成を明記している。担当者が、講座参加者が講座修了後にサークルを立ち上げたり、ご近所先生企画講座を行ったりという活動につなげることを意図して事業を企画・実施していることが成果として表れていると考えられる。

また、参加者も前例を見聞きしていながらの参加であり、活動を始めるのが自然な流れであることも事業を進めるための重要な前提となっている。

○「B 活動につながるための要因・要素」

「さっぽろ市民カレッジ」

担当者	参加者
<p>・はじめから、事業のねらいを明確にして参加者を募集しているため、「ボランティア活動をしたい」という参加者が集まってくる。したがって、ねらいどおり活動につながっている事業が多い。</p> <p>・サークル内で活動の方向性に違いが出るなどで、継続しないケースもある。</p>	<p>・ボランティアに興味があつて講座に参加したので、講座修了後もボランティア活動を続けたいと考えていた。</p> <p>・担当者の声かけもあり、25名の受講者のうち10名が集まり始まった。中心となる人物は特にいなかった。当時は、歌うことが楽しくて、続けなくなった。</p> <p>・活動の開始にあたり、市民カレッジの講師であった人にサークルの指導を頼んだ。</p>

「市民講師育成事業」

担当者	参加者
<p>・市民講師育成のために、講師募集説明会を実施し、ご近所先生希望者から企画書の提出を受け、実施を決定。その後、2回の研修会で、講師として必要な知識を学び、ご近所先生企</p>	<p>・それまでは、個人で活動していたが、フォローアップの必要性を感じていたところ、偶然ご近所先生講座の存在を知り、個人での講座以外にご近所先生として講座を増やし実施す</p>

<p>画講座の内容を確定し、講座を実施するという流れになっている。</p>	<p>るようになった。また、講座開設にあたり<b>学習プログラムの作成支援</b>をいただいたことは大変助かった。</p> <p>・札幌ハーモニカクラブが行う定期演奏会の参加者アンケートにハーモニカ教室の実施を希望する声が多く、それに応えるために教室の実施を考え、ちえりあに相談したことがきっかけ。</p>
---------------------------------------	---

考察

「A 事業を進めるための前提」でも触れているが、担当者が事業の内容を検討する段階から、参加者がその後も活動を継続するように計画していることが、実際の活動につながる要因であると考えられる。

また、ねらいを明確にして参加者を募集することで、そのような活動に興味のある参加者が集まるよう工夫している。さらに、講座が終了した後もボランティア活動を続けたい方のための、仕組みを用意していることが活動を始める重要な要素となっていると考えられる。

特にご近所先生になる方には**2回の研修会**があるように、**学習プログラムの作成支援等の講座運営のための研修機会を提供する**など、活動する方に寄り添いサポートしている。

○「C 活動の継続につながる要因・要素」

「さっぽろ市民カレッジ」

担当者	参加者
<p>・ちえりあで活動している<b>サークル</b>とすることで、<b>活動場所の確保</b>を行えるようにしている。</p>	<p>・練習に必要な<b>場所の確保</b>（ちえりあの施設予約）は、講師が行っている。</p> <p>・ボランティアに行く先は、自分たちで探して実施している。</p>

「市民講師育成事業」

担当者	参加者
<p>・市民カレッジの「<b>ご近所先生企画講座</b>」を市民カレッジの他の講座と同様に<b>事業の周知、参加者募集</b>を行っている。</p>	<p>・講師の急な体調不良による欠講の連絡などの講座運営のサポートをちえりあの担当者が行ってくれるので助かっている。</p> <p>・講座実施の支援をしてもらっている。特に個人では難しい<b>事業周知と参加者募集</b>が助かっている。</p>

考察

ちえりあには、サークル、ご近所先生企画講座といった学んだことを活動につなげる仕組みがあり、**活動場所の提供や、事業の周知や参加者募集**などを組織的に行うことができていること、さら

に、ご近所先生企画講座においては講座運営のサポートを行うなど、活動する人に寄り添った対応をしていることが、活動が継続する大きな要因であると考えられる。このことで、サークルは活動しやすい環境を得ることができ、ご近所先生は講師として教えることに集中する環境を得ることができると、参加者にとっては活動を継続しやすい要素が整えられている。

(聞き取り調査協力者)

所属	氏名
札幌市教育委員会生涯学習課社会教育主事	田 渕 裕 貴 氏
公益財団法人札幌市生涯学習振興財団（ちえりあ指定管理者）	
事業課学習企画係長	南 部 大 樹 氏
同 学習企画係	丸 山 聡 子 氏
参加者：「さっぽろ市民カレッジ」	真 柄 紀 子 氏
同 ：「市民講師育成事業」	越 郷 一 代 氏
同 ：「市民講師育成事業」	伊 東 袈裟男 氏

聞き取り調査実施日 平成 31 年 2 月 6 日

(参加者の一部は、2月20日と22日)

## 事例2 留寿都村「留寿都村豊かな地域づくり女性活動事業」

### (1) 事業概要

#### ○「留寿都村豊かな地域づくり女性活動事業」

・留寿都村女性団体連絡協議会への補助事業であり、女性団体連絡協議会が行う「ほっとなサロンういず・ゆー」等の地域貢献事業への補助という意味合いが強い。女性団体連絡協議会は、「村内に居住する女性会員相互の交流を図り、明るい豊かな家庭及び地域を築くこと」を目的とし、平成10年3月に留寿都村婦人団体連絡協議会が解散した後に、婦人団体連絡協議会の有志が中心となって平成10年10月に新たに設立され、主体的な地域活動を行う団体として活動している。

### (2) 聞き取り調査の結果

#### ○「A 事業を進めるための前提」

担当者	参加者
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「婦人団体連絡協議会」の頃から存在した補助事業であり、「女性団体連絡協議会」として設立する際にも教育委員会の社会教育担当者が関係者との調整等に尽力し、現在も事業の打合せを含めた諸会議に出席するなどしている。</li> <li>・第4期留寿都村社会教育中期計画には、団体の育成として、「留寿都村豊かな地域づくり女性活動事業」の記載がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「女性団体連絡協議会」として村の盆踊り大会、「ほっとなサロンういず・ゆー」などの地域貢献事業の他、公民館祭り等への協力、団体内の研修会・講習会等を行っている。</li> </ul>

#### ・ 考察

社会教育関係団体への補助事業であるので、団体の主体的な活動は大前提ではあるが、事業の打合せ等に社会教育関係者が出席するなど、教育委員会から団体への指導・助言が適切に行われる関係にある。

#### ○「B 活動につながるための要因・要素」

担当者	参加者
<ul style="list-style-type: none"> <li>・団体の設立に関わっては、設立メンバーの方々の意識が高くさらに核となる人材も多くいた。また、教育委員会で事務局をもつ（現在は、団体で行っている）など教育委員会で多くのことを負担した。</li> <li>・補助金の意味合い（村に貢献する活動を行うこと）を団体に伝え、ボランティア活動を促した。</li> <li>・事業後の反省会に参加し活動内容の助言を行う、活動内容の相談にのる、活動場所を提供するなどしていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・村のためにボランティア活動をしたいというメンバーがおり、教育委員会からも活動のための準備やバスの運行等支援を受けることができた。</li> </ul>

・ 考察

「設立メンバーの意識が高く、核になる人材がいた」ことが、この場合一番大きな要因であると考えますが、教育委員会からの様々な支援があることも団体の構成員がやる気になる大きな要因であろう。

○ 「C 活動の継続につながる要因・要素」

担当者	参加者
<ul style="list-style-type: none"> <li>・参加者が連絡を取りやすい窓口と言うことで、一部事業の申込窓口になっている。</li> <li>・自主独立で動ける組織であるため、現在は、バスの運行や事業の打合せがある程度ではあるが、相談を受けている。</li> <li>・今後については、現在、教育委員会の主催事業ではできないほど、参加者のことを考えたきめ細やかな事業展開をしている自立した団体であることから、相談相手の立場で活動を支援していきたいと考えている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・役員会等に必ず担当者が出てきてくれること、バスが無料で使えること等の支援がありがたい。</li> <li>・今後については、構成員の高齢化や人数の減少など不安なことはあるが、一緒に活動する仲間が増えるよう活動を続けていきたい。</li> </ul>

・ 考察

担当者が、団体への必要な支援を見極め、バランス良く関わっている。補助金やバスが無料で使えるなどのハード面での支援もさることながら、「役員会等に必ず担当者が出てきてくれること」が団体の活動に安心感を与えるとともに、「教育委員会の主催事業ではできないほど、参加者のことを考えたきめ細やかな事業展開をしている」というような高い評価をされていることが、活動が継続している要因であろう。

(聞き取り調査協力者)

所属	氏名
留寿都村教育委員会社会教育係兼学校教育係主任	高 田 里 美 氏
留寿都村教育委員会生涯学習推進員	和 田 幸 弘 氏
留寿都村女性団体連絡協議会会計	片 野 千 秋 氏

聞き取り調査実施日 平成 31 年 2 月 8 日

### 事例3 八雲町「YOU・遊・クラス」「あんどん型山車づくり講習会」

#### (1) 事業概要

##### ○「YOU・遊・クラス」

八雲町中央青年学級として昭和48年にスタートした事業で、平成7年度より現在の名称に変更して行われている。働く青年同士の交流を中心に住みよい地域づくりについて考えることを目的とし、スポーツ交流や陶芸体験等を通じた交流をするとともに、「あついべや祭り」に出展するブースの企画・運営や「八雲さむいべや祭り」への参画等を行っている。

##### ○「あんどん型山車づくり講習会」

町民が一丸となって取り組める「八雲山車行列」を目指して行われている事業で、「あんどん型山車」の絵の描き方の基本技術を学び、地域・職場等のグループで山車を制作し、参加できるきっかけを作っている。

#### (2) 聞き取り調査の結果

##### ○「A 事業を進めるための前提」

###### ・「YOU・遊・クラス」

担当者	参加者
<p>・青年学級としてスタートした事業で現在は青年の居場所づくりの意味合いがある。働く青年同士の交流を通して豊かな人格形成を図られる仲間づくりを進めることをねらいとしている。</p>	<p>・子ども向けイベント「あついべや祭り」や「さむいべや祭り」、他の団体との交流等に参加しているメンバーがいる一方、「YOU・遊・クラス」自体にたまにしか参加していないメンバーもいた。</p>

###### ・「あんどん型山車づくり講習会」

担当者	参加者
<p>・八雲山車行列実行委員会が主管して行う事業で、山車行列に町民が取り組み、参加することを旨とした事業である。</p> <p>・これは「YOU・遊・クラス」にも関係することではあるが、第2期八雲町教育推進計画において青年・成人教育の領域で具体的な方策として「地域づくりや学校外活動を支援するための指導者の育成と活用に努めます」「地域行事への参加や、協力する団体・グループの活動を支援します」との記載がある。</p>	<p>・聞き取りをした中には、八雲山車行列実行委員会の委員長と事務局長もおり、その2名に関しては、「あんどん型山車づくり講習会」等を通してその魅力を伝える側になっている。</p> <p>・地元の八雲町の人たちのための祭りと考えているため、商業化せず八雲山車行列を盛り上げていこうという意識が強い、他の方については「『YOU・遊・クラス』の活動として講座に参加し、山車行列にも参加している」とのことであった。</p>

###### ・考察

「YOU・遊・クラス」と「あんどん型山車づくり講習会」のどちらの事業も地域活動への参加・参画を前提とした事業である。参加者の中には若干の温度差があるようにも感じたが、担当者も含め、事業の参加者と運営者が「事業のねらいや目的」を理解し、取り組んでいる。

○ 「B 活動につながるための要因・要素」

・ 「YOU・遊・クラス」

担当者	参加者
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「YOU・遊・クラス」のメンバーを募集するにあたり、<b>担当者が町内のイベントで出会った若者を勧誘</b>したり、現役の<b>メンバーの紹介等</b>を受けたりしながら、<b>メンバーの増加に努めている</b>。</li> <li>・「あついべや祭り」「さむいべや祭り」「あんどん型山車づくり講習会」など地域に貢献する活動を「YOU・遊・クラス」のプログラムに入れていたり、<b>担当者から参加を提案</b>したりしている。また、事業の趣旨に思いのあるメンバーや「この人がいる」という癒やし系のキーパーソンがいる他、この事業に「<b>肩肘の張らない、良い意味でのユルい空気感</b>」があることが良いと考えている。</li> <li>・そのために心がけていることとして「<b>青年を対象とした学習会やお祭り、イベントの紹介や参加をすすめる</b>」、「<b>強制しないこと</b>」、「<b>無理をしない範囲でできるものをすすめる</b>」、「<b>お楽しみの要素を加える</b>」、「<b>LINEの活用</b>」を挙げている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本事業は事業と活動が一体化したもののため、事業への勧誘と活動への声かけは同じことになるが、きっかけとしては聞き取りした全員が「<b>担当者からの声かけ</b>」と答えている。参加の際の理由は、「<b>知り合いづくり</b>」「<b>まちのことを知りたかった</b>」等が挙げられていた。</li> <li>・やりがいについては「<b>自分の主体性を生かせる</b>」、「<b>やりたいことを実現できる</b>」、「<b>気楽に参加できる</b>」、「<b>集まるのが楽しい</b>」「<b>自発的にはやろうと思わなかったようなことを体験するきっかけをもらえること</b>」が挙げられていた。</li> </ul>

・ 「あんどん型山車づくり講習会」

担当者	参加者
<ul style="list-style-type: none"> <li>・この事業の運営者（主管する八雲山車行列実行委員会）が八雲町の<b>山車行列文化を誇りに思い、後世に残したいという気持ちをもっていることが重要だ</b>と考えている。</li> <li>・「山車行列」が先にあり、「あんどん型山車づくり講習会」がその担い手育成のためにできた事業なので、<b>事業自体がきっかけ</b>となっていると考えている。</li> <li>・担当者として心がけていることは、「運営者がタイトなスケジュールの中で締め切りに追われる活動が多いので、<b>行動予定の確認など</b>を行っている」ということであった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本事業については「<b>山車行列</b>」へ参画・参加することが地域活動につながったという捉え方になる。</li> <li>・きっかけややりがいとして、山車行列の実行委員である2名は「<b>山車行列を運営する先輩から誘われて</b>」、「<b>参加者の笑顔</b>」、「<b>山車行列の楽しさ等を伝えたい</b>」を挙げている。</li> <li>・他の方は、「<b>まちの賑わいにつながる</b>」、「<b>『YOU・遊・クラス』の活動として</b>」、「<b>楽しい</b>」等の理由で「山車行列」に参加していると答えている。</li> </ul>

- ・ 考察

「YOU・遊・クラス」については、担当者が参加者を集めることに大きな労力を注いでいる。どの参加者からも聞かれた「担当者からの声かけ」が非常に大きな効果を生んでいると考えられる。また、担当者、参加者の双方から聞かれたキーワードとして「ユルい活動」があった。青年層を対象とした事業であるので、活動の日程調整・計画づくりをしながらも主体性を促すために「強制はしないが、活動はしている」状態を継続していることが、参加者に安心感を与えるのではないだろうか。

「あんどん型山車づくり講習会」については、この事業を主管する八雲山車行列実行委員会の活動の場でもある。ある意味、「学びと活動の循環ができあがっている事業」と言える。担当者、参加者ともに「八雲山車行列」への熱い思いがあり、その上で信頼できる八雲山車行列実行委員会と教育委員会担当者との関係が必要であると考ええる。

- 「C 活動の継続につながる要因・要素」

- ・ 「YOU・遊・クラス」

担当者	参加者
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 担当者が行っている支援として「活動場所や物品の提供」「連絡窓口」「保健所等への行政手続き」「活動の相談にのる」「町のホームページやフェイスブックでの情報発信」「仲間集め」を挙げている。また、自身も活動に参加している。</li> <li>・ 今後については、「行政としての視点を盛り込みながら、クラスの自主性を尊重しつつ、クラス外との調整係を含め、活動を推進したい」としている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 担当者等からの役立っている支援として「活動について相談ができる（してくれる）」、「活動場所の提供」、「様々な情報の提供」、「計画づくりへの支援」、「活動の日程調整」「人をつなぐこと」が挙げられていた。</li> <li>・ 今後については、「活動を大きくし、まちの知名度を上げたい」、「現状維持で、ユルく楽しくやっていきたい」、「若者の 3rd place となるよい」等を挙げていた。</li> <li>・ 不安に感じていることとしては、「やりたいことはたくさんあるが時間がない」、「人数が減ること」を挙げていた。</li> </ul>

- ・ 「あんどん型山車づくり講習会」

担当者	参加者
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 担当者が行っている支援として「活動の相談にのる」「活動場所の提供」「外部との連絡窓口」「物品の管理」「役員会への出席」「町内外への活動 PR など」を挙げている。また、自身も活動に参加している。</li> <li>・ 今後については、「主管団体の考えを尊重しつつ、夏の八雲を代表する文化の発展と継</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 役立っている担当者等からの支援として、山車行列の実行委員である2名は「対外的な窓口」、「資料作成」、「情報提供」を挙げている。</li> <li>・ 「八雲山車行列」や「あんどん型山車づくり講習会」の町における担当部署が教育委員会にあることについて、「教育委員会であ</li> </ul>

<p>承のために今後も行政として活動を支援していきたい」としている。</p>	<p>るから、八雲行列実行委員会の自主性を尊重してもらっている。八雲町の人のための祭りを展開できている。」と話していた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今後については、「まちの人が参加して楽しい祭りを続けていきたい」、「単なるイベントではなく山車行列を通じて町民がつながる場をつくっていきたい」と話していた。</li> <li>・不安に感じていることとしては、「山車行列の参加者の減少」を挙げ、「次代の山車行列の担い手となる 20 代の住民をどう取り込むか工夫していかなければならない」と話していた。</li> </ul>
--	--

・ 考察

どちらの事業も担当者は、「相談相手」「連絡調整の窓口」「外部への情報発信」を担っており、参加者もこの点を評価している。担当者としては、「参加者や主管団体の主体性を尊重しながら行政としての視点も盛り込んで支援をしていく」スタンスであり、**事業の目的を意識している参加者にとっても win-win の関係を築けている**ことが活動の継続につながっているのではないかと。

(聞き取り調査協力者)

所属	氏名
担当者：八雲町教育委員会社会教育課社会教育主事	川 口 絢 未 氏
参加者：「YOU・遊・クラス」「あんどん型山車づくり講習会」	川 岸 直 樹 氏
参加者：「YOU・遊・クラス」「あんどん型山車づくり講習会」	秋 山 世 奈 氏
参加者：「YOU・遊・クラス」「あんどん型山車づくり講習会」	谷 口 未 来 氏
参加者：「YOU・遊・クラス」「あんどん型山車づくり講習会」	國 門 唯 佳 氏
参加者：「あんどん型山車づくり講習会」	佐 藤 正 之 氏
参加者：「あんどん型山車づくり講習会」「YOU・遊・クラス」	政 田 翔 太 氏

聞き取り調査実施日 平成 31 年 2 月 2 日

#### 事例4 旭川市 「シニア大学」「シニア大学院」

##### (1) 事業概要

###### ○ 「シニア大学」「シニア大学院」

###### ・ 事業内容

旭川市中央公民館百寿大学・大学院を母体に、平成 23 年に開設された高齢者のための大学である。その開設趣旨には、「学びの成果を積極的に地域社会に活かし、まちづくりの一翼を担う人材を輩出することを目的とし、」と明記されている。

なお、学習課程としては、大学 1・2 年を「基礎課程」、大学 3・4 年を「発展課程」、大学院 1・2 年を「実践課程」としている。特に、大学院生には「地域社会のよきリーダーとして貢献するために必要な場を提供する」としており、別自主活動などの学習内容が組み立てられている。

「シニアの会」は、平成 23 年にシニア大学・大学院で学んでいた社会貢献活動をしたい高齢者が集まりできた団体で、シニア大学や公民館講座等のボランティアと自身の研修活動を行っている。

##### (2) 聞き取り調査の結果

###### ○ 「A 事業を進めるための前提」

担当者	参加者
<p>・「シニアの会」は、それまで旭川市シニア大学・大学院で学んだ高齢者に、より積極的な地域での活動ができるよう立ち上げた団体で、旭川市生涯学習基本方針(H19)に示されたまちづくりの一端を具現化したものである。</p>	<p>・「シニアの会」は平成 23 年から 7 年間続いた活動で、概ね月 1 回程度の運営会議と研修会を行いながら、「1000 人の大合唱」への参加や、「食べマルシェ」のボランティア、シニア大学が学生以外の方とも交流しながら学ぶ場として設定した「まちなか講座」のボランティア、公民館講座の講師などを行っている。</p>

###### ・ 考察

「シニアの会」は「高齢者による学習成果の還元」を行う組織として、「シニア大学」をスタートしたときから同時に活動しており、市として計画的に「高齢者による学習成果の還元」を行うことを目指したことがうかがえる。また、「シニア大学」「シニア大学院」の卒業生等の積極的に活動しようとしている方の受け皿として機能している。

###### ○ 「B 活動につながるための要因・要素」

担当者	参加者
<p>・平成 23 年の「シニアの会」発足にあたっては、それまで百寿大学等で学んでいた「活動意欲に富んだ核になりそうな人物」に声をかけた。</p> <p>・現在は、「シニア大学」の 4 年生や大学院生</p>	<p>・「シニアの会」の活動に参加するきっかけとなっているのは、「シニア大学」で学んだ仲間が継続して「シニアの会」で活動していること、「ボランティアをしたい」という思いがあること。</p>

に「シニアの会」の案内をしている。 ・ボランティアや公民館講座の講師を依頼するなどしている。	・やりがいとしては、研修が充実していること、ボランティアができること。
---	-------------------------------------

・ 考察

シニアの会の発足当初は「核になる人物」が会の運営にあたり様々なことに活躍していたということである。リーダーシップを取ることのできる会内部の人材の役割は重要である。また、何年か活動が継続し、「シニア大学」の学生に「シニアの会」の存在が認知されると活動の受け皿として機能することがうかがえる。

○ 「C 活動の継続につながる要因・要素」

担当者	参加者
<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動場所の提供やボランティア活動に関する提案、会の運営に関する相談等を担当職員が行っている。</li> <li>・「シニアの会」が自らボランティアをする先を探し活動するなどの主体的な活動を行うことが理想と考えているが、現在は、担当者が様々な提案を行う形で活動が継続している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在、「シニア大学」の専門指導員が2名体制でサポートしてくれており、大変助かっている。特に、運営会議の内容をまとめてくれていること。</li> <li>・活動しやすい活動場所を提供してくれていること。</li> <li>・今後の活動については高齢化による会員不足が心配だが、現状維持をしながら考えていきたい。</li> </ul>

・ 考察

現在「シニアの会」の活動は、市からの活動に関する提案を主体的に判断し、協力しているという形であるが、市としてはより自主的主体的な活動を望んでいることがうかがえた。今後に向けて、市としては徐々に主体的な活動が展開できるよう支援の方法を変えていくことを模索している状態のようである。

(聞き取り調査協力者)

所属	氏名
旭川市教育委員会社会教育部公民館事業課事業係 主査 社会教育主事	小林 宏文 氏
旭川市教育委員会社会教育部公民館事業課旭川市シニア大学 専門指導員	佐崎 裕 氏
シニアの会 会長	納谷 義明 氏
シニアの会 副会長	田丸 信子 氏

聞き取り調査実施日 平成31年2月4日

## 事例5 西興部村「西興部村地域学講座」

### (1) 事業概要

#### ○「西興部村地域学講座」

##### ・ 事業内容

住民に対して住んでいる地域の魅力や資源の気づき、再確認してもらうことをねらい、地域の遺跡や自然に関わる内容の講座を行っている。テーマを H28「氷のトンネルの神秘を探る」、  
「札滑・忍路子遺跡の人たち～北廻りの石器文化～」、H29「シカ肉は栄養がいっぱい」、H30「ヒグマの生態～もし熊に出会った場合の対処法～」として年間1～2回の講座を行っている。

### (2) 聞き取り調査の結果

#### ○「A 事業を進めるための前提」

担当者	参加者
<ul style="list-style-type: none"> <li>・第4期西興部村総合計画には、生涯学習を進める施策として「地域学講座」が明記されている。</li> <li>・担当者が意図的に村民を対象とした「自然観察会」の運営者として「地域学講座」の参加者（にしおこっぺ田舎クラブ等）に協力を依頼している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・にしおこっぺ田舎クラブは、平成28年1月に発足した。（前身はフットパスを楽しむ会）</li> <li>・活動としては、フットパスに関する教育委員会との共催事業、「自然観察会」の支援。</li> <li>・主催講座「きのこと講座」の企画・運営。</li> <li>・仲間と楽しいことをしたい。</li> </ul>

##### ・ 考察

総合計画には「地域学講座」による地域の担い手育成とまでは記載されていないが、担当者がある事業とその類似事業の参加者の前向きな意思がある方々を結びつけた結果、担い手としての活動につながった例であると考えられる。

#### ○「B 活動につながるための要因・要素」

担当者	参加者
<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当者として、新たな住民など地域の魅力に気がついていない人たちに、地域を知り、将来のまちづくりについて考えてもらいたいという思いがあった。</li> <li>・村の各種団体と接することで、一緒に事業に参加していただくことを意識している。</li> <li>・団体と接する中で、どの人に声をかけるか見当がついていた。（核となりそうな人を見極めた）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当者から声をかけられ協力することになった。</li> <li>・自然環境とのふれあいが好きであり、自分自身の健康維持にもつながっている。</li> <li>・仲間と一緒に活動できる。</li> </ul>

##### ・ 考察

担当者が、村の団体の状況を把握し、どこにどの内容を依頼すると良いのか見当がついていることが活動につながった大きな要因であろう。事業の協力者として依頼される相手にとっても良いことがある win=win の関係性を築いていると考えられる。

○ 「C 活動の継続につながる要因・要素」

担当者	参加者
<ul style="list-style-type: none"> <li>・村内団体の事業の講師等に関する費用を教育委員会が負担できる事業の紹介。</li> <li>・団体主催事業への参加者や運営者としての参加。</li> <li>・今後もこれまで同様、互いの事業に参加・参画する関係性を保ちながら、各団体の取組を支援していきたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラブ主催事業の講師費用の負担、広報等が役に立っている。</li> <li>・今後は、現状維持+αのできる範囲の仲間内の楽しさと、クラブでの社会貢献活動を進めていきたい。</li> <li>・仲間の高齢化は不安だが、楽しいことをやり続けたい。難しいことは行政に相談しながら続けたいと考えている。</li> </ul>

・ 考察

人口 1100 人ほどの村であることも担当者と団体（参加者）が密な関係にある要因とも考えられるが、担当者が団体の事業に参加することや団体がやりたいことをやれるように行う支援により、学びと活動の循環が図られていると考えられる。

人口規模により、行政と関係団体の距離、関係性の在り方が変化するものとは思いますが、小さな自治体においてこのような関係性を築くことは住民の学習と活動の循環を進める第一歩となるのではないだろうか。

（聞き取り調査協力者）

所属	氏名
西興部村教育委員会 主幹 社会教育主事	黒田正美氏
にしおこっぺ田舎クラブ 会長	伊藤陳良氏

聞き取り調査実施日 平成 31 年 2 月 25 日

## 事例5 弟子屈町「弟子屈高等学校・公民館連携講座」「公民館ミニコンサート」「少年の主張弟子屈大会」

### (1) 事業概要

#### ○「弟子屈高等学校・公民館連携講座」「公民館ミニコンサート」「少年の主張弟子屈大会」

##### ・事業内容

今年度から取り組んだ事業で、「弟子屈高等学校・公民館連携講座」や吹奏楽部による「公民館ミニコンサート」、生徒会の役員による「少年の主張弟子屈大会」等、教育委員会からの協力依頼を受けて、高校が協力して地域貢献を行っている事業である。

### (2) 聞き取り調査の結果

#### ○「A 事業を進めるための前提」

担当者	参加者
<ul style="list-style-type: none"> <li>・弟子屈高校の入学者の減少から、高校の存続問題が持ち上がっている状況にあり、町としては地域振興及び人材育成の観点から「<b>高校生の地域貢献活動</b>」を高校の魅力として地域内外にPRして弟子屈高校の入学者を増やし、地域の担い手づくりに繋がりたいと考えている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・町からの依頼により、「少年の主張」や「成人式」で、司会をする機会をいただいたと考えている。(生徒)</li> <li>・高校として地域貢献は大切であるということ認識しており、小規模校で難しい面もあるが、町との事業連携にはできるだけ応えたいと考えている。(教頭)</li> </ul>

##### ・考察

弟子屈町としては、「高校の魅力化」を地域と高校生の相互理解を深めるイメージをもって高校との連携を進めている。一方、高校は「地域貢献」を行うことの生徒に与えるプラスの影響を理解しつつも、小規模校であり人的な制限が伴う中でどのようにして多くの生徒を様々な事業に参加させることが出来るかが今後の課題となる状況のようであった。今年度からの取組ということで、連携の手法等についてはこれから両者で協議していくことになるようである。

#### ○「B 活動につながるための要因・要素」

担当者	参加者
<ul style="list-style-type: none"> <li>・公民館講座での「料理講座」(高校のクラブが協力)や、「少年の主張」の司会等、高校に相談した際には、前向きに検討していただいている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒会の役員をやっている中で先生から声をかけてもらった。(生徒)</li> <li>・かかわりのある学年の成人式の司会ができてうれしかった。(生徒)</li> <li>・大人と一緒に活動できたことはいい経験になった。(生徒)</li> <li>・人前で話すことや大人と関わる良い機会があった。(教頭)</li> </ul>

##### ・考察

町は連携できそうな事業を高校に提案し、高校がその提案に対し、「どこまで協力できるのか」、「どの生徒に協力してもらおうのか」等を検討し、協力している状況である。活動に関わっ

た生徒にとってはよい経験となっているようである。

○「C 活動の継続につながる要因・要素」

担当者	参加者
<ul style="list-style-type: none"> <li>平成 31 年 2 月に一部改訂した第 2 次弟子屈町教育推進基本計画において、公民館講座等開設事業の内容の中に「弟子屈高校との連携講座の継続実施」を明記し、さらに、「弟子屈高校地域貢献支援事業」を施策項目として盛り込んだ。</li> <li>町としては、これら事業を通して、高校生と地元住民の触れ合う機会を増やすことで、地元に戻ってきてくれる人材になってもらいたいと考えている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>町の人に話しかけてもらえることはうれしいし、高校を PR できることを考えるといい機会だと思うが協力する頻度は今くらいでいい。(生徒)</li> <li>学校規模が縮小していく中、如何に人員的なハンデを克服しながら連携体制を築いていくかが課題である。(教頭)</li> </ul>

・ 考察

本格的に事業展開を始めたのが今年度、1 年目の事業であることを考えると、連携・協力体制を継続しながら「どの部分」を「どのくらい」ということを明確化させること、「この活動により高校生にどのように成長してほしいのか」という町と高校側の相互理解が今後さらに必要になってくると考えられる。

(聞き取り調査協力者)

所属	氏名
弟子屈町教育委員会社会教育課課長補佐	川井田 東 吾 氏
〃 公民館学習推進係長	杉 崎 瑞 穂 氏
〃 社会教育係主事補	山 野 太 郎 氏
北海道弟子屈高等学校教頭	三 浦 知 道 氏
北海道弟子屈高等学校生徒 (3 年生 3 名、2 年生 1 名)	

聞き取り調査実施日 平成 31 年 2 月 28 日

### 3 聞き取り調査の考察

#### (1) 仮説の検証

##### ○A 事業を進めるための前提について

「事業主体・担当者の計画性」と「目的からぶれない一貫性」については、調査した事例の中に、社会教育中期計画にあたる計画への記述がある、または、担当者が見据える参加者が活動する姿が具体的であるということから、重要であろうと考える。

「住民が感じる必要性」については、その活動に必要性を感じるというよりは、「その活動を行いたい」という思いが強く感じられた。したがって、住民はその活動に必要性を感じた方がいいが、より効果的なことは、活動に関わる人が続けたいような仕掛けをすることであろう。

##### ○B 活動につながるための要因・要素について

「担当者からの働きかけ」については、とても有効であることがわかった。どの事業においても、担当者からの声かけや働きかけは、事業参加者が活動に移るきっかけとなっている。

「参加者同士のつながり」は、明確に必要なであるということがいえるのは、旭川市と西興部村の事例であった。どちらも高齢者が担い手の中心であることを考えると高齢者には「参加者同士のつながり」をつくるのが重要な要素になるのかも知れない。

「参加者の意識の向上」については、聞き取りの中では要因・要素として見い出せなかった。

「上記以外の何か」については、「一緒に活動する」「プログラムを作成の支援」等、参加者に寄り添う姿勢が挙げられる。また、若者を対象とした八雲町の事例では強制をしない「ユルい活動」がキーワードとして挙げられた。

##### ○C 活動の継続につながる要因・要素について

「活動場所の確保」、「支援者・相談相手の存在」については、聞き取りを行ったほとんどの市町村で要因・要素として挙げられている。特に「支援者・相談相手の存在」については、自治体の規模によりその関わり方も変わるが、どのくらいその活動を行う担い手に必要な支援をできるかということが重要である。その担い手の主体性を損なわない支援を見極め、行うこと（または行わないこと）が、社会教育担当者の手腕ということになるのではないだろうか。

「仲間の存在」については、「B 活動につながるための要因・要素」の「参加者同士のつながり」とも関係するが、対象によっては特に重要な要因となるのではないだろうか。

「活動に対するやりがい」については、聞き取りを行ったどの市町村においても何らかのやりがいが挙げられていた。その「やりがい」を生むのは、担当者や他の住民等から高い評価を受けることや活動する本人が「楽しい」と思っていることだと考えられる。

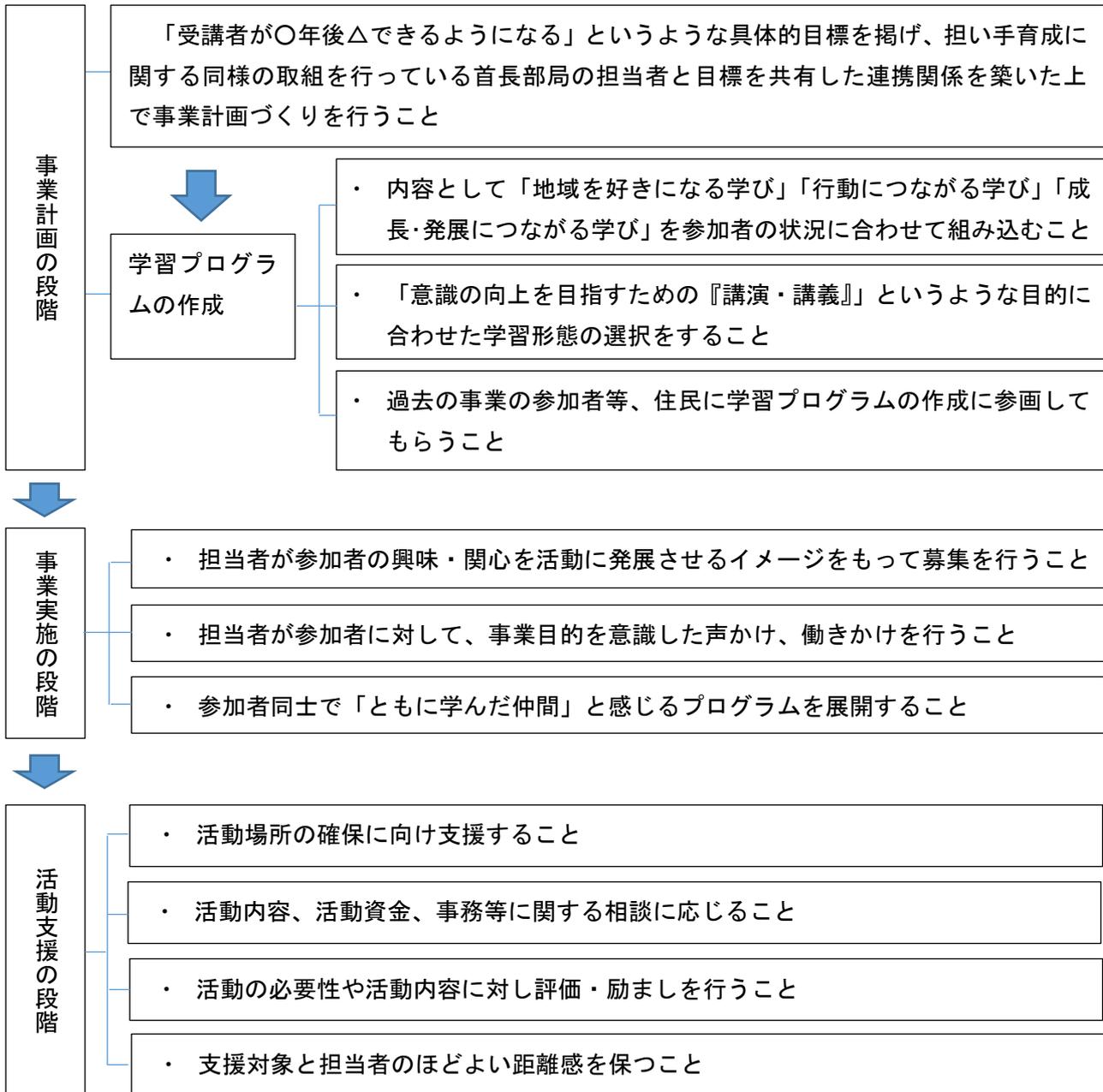
#### (2) 考察

仮説の検証から考察すると、地域の担い手を育成する上で、留意すべきこととして、「A 事業を進めるための前提」では担当者が事業の目的を意識し、成果イメージをしっかりとつこと。「B 活動につながるための要因・要素」では担当者が事業参加者に対して活動に導く働きかけを行うこと。「C 活動の継続につながる要因・要素」では、活動する担い手を評価し、認め、寄り添うこと。以上の3点が挙げられるのではないだろうか。

## 第4章 調査研究のまとめ

調査票調査の結果と聞き取り調査の結果から、社会教育行政が行う地域づくりの担い手育成に係る取組の各段階のポイントは以下のフロー図のようになると考えられる。

担い手育成事業のフロー図



上記のポイントを踏まえ、社会教育担当職員がまちの未来をイメージしながら、市町村内の行政間連携や団体等との連携を図り、事業を展開することで、より多くの住民が地域に関心をもち、その地域の担い手となって活躍する「持続可能な社会づくりに関わる学習活動」になっていくものとする。